

昭和三十八年三月

宮崎県文化財調査報告書

第八輯

宮崎県教育委員会

# ギョボク自生北限地帯

農文化財専門委員

平 田 正

一

## 一、形状

ギョボク樹幹の肌色は灰白色でイヌビワやクロガネモチの樹肌に類似し、樹形は直立

形で分枝が少い喬木であつて、常緑樹の間に混在しても口につきやすい。地中根は長くひき、これから不定芽を生じて容易に成木となる。挿木によつても繁殖はたやすい。葉は三個の小葉からなる掌状葉で、茎に互生し、各小葉は全縁で葉裏は稍々粉白を呈する特性がある。宮崎県に分布するものでは花の着生を見ないが、開花は夏で、葉腋に散状花序をつけ、初め黄色で後紫色となる。果実は漿果で紅熟

する。日南地方に分布するものは、この果実の鳥類による南方からの運搬によつて自生したものかも知れない。日南地方では冬はかなりの霜害をうけ、葉や枝先が枯れ、又幹も十米以上のものでは時に半ば以上も枯死するらしく、その都度萌芽を繰返すが、樹幹もせいぜい十米内外にとどま

るものと思われる。株は強風や寒さにも耐え、長く引いた根から不定芽を出して次々と独立樹を作り親株の周辺に族生する。この地方で発見された多くのギョボクは株元で切断され萌芽したものであつて自然形に伸長したものは少なかった。ギョボク生育地は一般に岩石の間に旺盛に根を張り強い生活力をもつて繁殖し、温暖な環境を選んだ凹地や、南面の海岸、又は杉林の中で発育している。

ギョボクはフウチョウソウ科のギョボク属に分類される。この科内の植物は熱帯から亜熱帯に分布する約五〇〇種がある。ギョボクの属中には数種があるが、その内ギョボクは南支那、印度、マレー、オーストラリアおよびアフリカに分布し、日本では琉球、屋久島、種子島、薩摩半島（指宿、山川）および大隅半島（佐多）に分布することが知られていた。その後宮崎県南部海岸附近でも稀に分布す

ることが次第に確められ、現在中開市合六の鼻、都井岬、市木、および日南市鶴戸があげられている。

黒潮沿いの大隅半島南部に続いて都井岬を廻り、鶴戸迄海辺沿いの山中に生育することが知られるに至つた。

ギョボク（魚木）は日南地方では別名をアマギ（琉球名）と呼んでいる。漁師はギョボクの材料を削つて魚型を作り、イカ釣りの偽餌木として最良に利用している。代用品としてはクサギ材が用いられる。南方に山かけた漁師は、島の山中からギョボクを採集して帰るという。

## 二、鶴戸のギョボク

1、所在地 宮崎県日南市大字宮浦字櫛平三二七六番地（鶴戸神宮所有地）

2、地目及地積 山林 三アール

3、現状 鶴戸神社社叢中最大の巨木である大杉の

樹下で、細い山道を距てた山林中に自生する。昭和三八年一月二九日の調査結果は次表の通りであつて、七本の群生からなり、かなりの巨木である。この自生地は山稜

に囲まれた凹地とその斜面で、大きな岩石の点在する中に生育している。面積は約二十米平方に及び、山林はカシナクが茂り、コジイ、イヌビワ、クロガネモチ、コバシモチ等の樹木からなつてゐる。この群生は同一親株からの繁殖したものと思われる。十米以上の大きい幹は樹高の三分の一先端が枯死している。この群生は明らかに自生と認められる。鶴戸のギョボクの最初発見されたものは、この自生地に隣接する南側畑地の周辺で、崖下の草むらに四株あつたものである。これは度々株元から切断され萌芽のみがみられたが、昭和三〇年頃この畑地がミカン園となり、ギョボクは全部廻り取られた。このギョボクは畑地の周辺にあり、各株の距離が等しかつたため栽植の疑があつた。本地のギョボクは昭和三八年調査時、異常の寒波と霜害のため葉が半分以上枯死して捲き上つていた。

ギョボク毎木調査 (昭和三年一月二十九日)

株番号	根元周囲	日通り	樹高	備考
1	九六	七八	一一〇	土幹二本に分岐
2	一〇〇	一〇〇	一一	土幹目通り切断され二本に分岐
3	九〇	一一五	七	
4	二〇	一五	五	
5	一〇〇	四五	七	土幹四〇で切断され二本に分岐
6	一〇〇	三三	六	土幹五〇で切断され四本に分岐
7	二〇	二二	六	

4、由来 鴉戸のギョボクについての最初の記録は、日野巖著「鴉戸の宮曆」(昭和一七年刊)に見られる。このギョボク発見の動機について著者に紹介したるも、何分以前のことである。発見の詳細は記憶にない、とのことであつた。

### 三、市木のギョボク

1、所在地 宮崎県串間市大字市木字磯平八八八番地 (大下伊之助所有地)

2、地目及地積 山林一アール

3、現 状 自生地は市木の藤浦部落から一五〇〇米離れ、軸部落に向う南向の草原傾斜地の山足を通る県道沿いである。ここは海岸迄四〇〇米で、二〇年生前後の小規模の杉木立林があり、ギョボクはこの林内に群生している。立地の環境は海岸で日当りよく開放されている。スギの木立は防風をなしている。ギョボクの群生は根によつて次々と繁茂したらしく、岩石の間に連つた根系が見られる。度々の伐採で巨木に発達したものはなく萌芽状態のものが多いが、根廻りはかなり大きいものがある。ここでも葉は半ば露害を受け枯死していた。

ギヨボク毎木調査 (昭和三八年一月三〇日)

株番号	根元周囲	日通り	樹高	備	考
1	四〇〇	三三〇	六		
2	四八	一五〇	五		主幹根元でされ三木に分岐
3	四三	八	三		主幹三五〇で切断三木に分岐
4	四八	三二			
5	四九	二五〇	四		主幹五〇で切断され三木に分岐
6	一九	〇〇			
7	三三	二二	二		
8	三二	三三	二		
9	三〇	三三	三		主幹五〇で切断され二木に分岐

4、由 来 このギヨボク自生地は、市木小学校教諭湯地重義氏によつて昭和三七年九月二日発見されたもので、それ迄道沿いにあり乍ら地方人も知らなかつたものである。

#### 四、都井岬のギヨボク

1、所在地 宮崎県串間市大字都井岬

#### 2 地目及地積 山林 二アール

#### 3、現 状

特別天然記念物都井岬ソテツ自生北限地の指定地域の山林内にある。現在迄に確認されているギヨボクは二ヶ所にあつて、その一は坊主屋敷と呼ばれている猿寄場から東の凹地を約三〇〇米登つた左の谷間である。他の一つは猿寄場の西側を流れる小川を距てて、川から二〇米余り登つた斜面山地である。前者のギヨボクは稚樹の群生からなり、一連の根系で繁殖したものと思われる。度々の株元からの切断で根廻りは発達しているが、幹の生長したものは少く萌芽が多い。後者は森林伐採跡地に残されたもので、稚樹が育ちつつあるが、ギヨボクは岩石の間に根を張り、谷間を吹き上げる風に抗して一際高く二本の幹が孤立している。このギヨボクは鶴戸のギヨボクと同じく伐採された様子がなく、自然形で保存されたものと思われる。都井岬から鶴戸の日南海岸地帯がギヨボクの自生北限地と見られ、ここでは既に十分な発育をなしえず、過去においては寒気と強風で幹の半ばは枯死と伸長を繰返したものと推察される。

ギョボク毎木調査 (昭和三八年一月三十一日)

坊主屋敷東側のギョボク

株番号	根元周囲	間日通開	樹高	備考
1	四八〇	四三〇	五・五	主幹一・五〇切斷二本に分岐
2	六三	三〇〇	三	主幹五〇〇で切斷で二本に分岐
3	三三	三〇〇	三・五	
4	二二	三	三	
5	七	一・五	一・五	
6	四〇	三・五	三・五	

坊主屋敷西側のギョボク

株番号	根元周囲	間日通開	樹高	備考
1	一〇〇	八〇	九	地上二・五〇で二本に分岐
2	二二〇	四〇	九	地上五〇〇で二本に分岐

4、由来 都井岬のギョボクは時任岩助、同サツエ

夫妻によつて昭和三二年先づ坊主屋敷東側のギョボクが

発見されたものである。同氏は元小学校校長で当時都井岬の野生猿の餌づけを最初に手がけられ、山中を精査された際、偶然に発見された。その後続いて坊主屋敷西側のギョボクも同氏等によつて発見された。

五、その他のギョボク

ギョボクの自生地は前記三ヶ所以外に都井岬北海岸の野々許山中にもあることが時任岩助氏によつて知らされた。又大隅半島の太平洋岸滑いの自生地と連続である串間市合六の鼻にもある。昭和三七年夏訪れた時、道傍に多くの切株からの萌芽稚樹が見かけられた。三米以上の幹の大きいものは全く見られなかつた。合六の鼻は、パツシヨンフルーツ、パパヤおよびバインアツプル等の熱帯果物の自然栽培地として特殊な気候条件を有し、無霜の温暖地であつて、熱帯植物ギョボクの自生も当然なことである。

六、微証

ギョボクの日本における分布について参考となる文献は次の様なものである

- 1、初島住彦、天野鉄夫著沖繩植物目録昭和三三年

2、日野巖著 鵜戸の宮居 昭和一七年

3、牧野富太郎著 新日本植物図鑑 昭和三六年

4、内藤喬、梶原重盛著 鹿児島県自生植物目録 昭和九

年

## 七、保存の要件

日本産のフウチヨウソウ科植物は栽培のセイヨウフウチヨウソウを除いて、自生の植物はギョボク唯一種である。ギョボクは熱帯植物としても興味あり、宮崎県日南地方はギョボクの種としても、又、フウチヨウソウ科の科植物としても北半球における分布の北限地帯である。今日確認されたそれぞ

れの群生地は、植物地理学および地学的にも重要な参考物件となりうるものと思われるので、法律によつて保存し後代に継承することが適當であると考えられる。



瀬戸のヤモボク



日南海岸のヤモボク自生地 (×印)





市木藤瀬のギョボク自生地



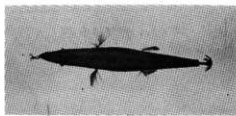
郡井峠のギョボク



市木藤瀬のギョボク



側 面



背 面

日南地方で使用する割木

